

更にフロイド、ユング、アドラーの精神分析法、又マグドウガルの目的心理學による療法や現代精神治療の綜合的方法等に就いて述べ、更に進んで健康の性質、治療に於ける信仰の性質及び位置、治療科學の性質及び位置等組織的建設的に述べて居る點この種の著述の中最も優れたもの一つであると考える。教會に於ける心理クリニックの實際に就いても又その實例を擧げて居る。(本宮)

石原謙「中世キリスト教研究」

昭和二十七年 岩波書店刊行 三四〇頁
定價六〇〇圓

我が國の基督教會に於てキリスト教に関する歴史學的研究が他の分野に比して盛んではない今日、その方面で二〇年間の研究をつづけて來られた石原氏がその勞作を發表された事は誠によろこばしい。

中世キリスト教の研究についてはカトリック教會側に於いては熱心であるが、それはどこまでもカトリシズムの教義の上に立つ抽象的な歴史解釋に終る觀があり、歴史それ自體に即する事(Sachgebundenheit)と云う面に於てつねに不満な點を感じざるを得ない。さりとて吾々プロテスチント側がその負い目を果してゐるかどうか、我が國に於ける中世教會史の研究を省みる時、個々の専門的研究—それとても僅かであるが一は別として教會史的研究は未だなされていないと云つても過言ではない。その意味で

氏の著作に對して實は私自身期待を以て読み始めざるを得なかつた。

この著は(一)キリスト教の歴史的形態、(二)アウグスチヌス、(三)キリスト教的中世、(四)中世の大學生に分れ、各部が夫々細別されそれ自體として一つの専門研究となつてゐる。讀んで感じたところを率直に云いあらわせば、これ程細かく別けられて夫々に専門的な研究がなされている割に一つの問題についての徹底的な究明がなされず、同じ問題が散在してとりあつかわれており何か食いたらぬものをおぼえしめる。更にそれでは初めに期待したように中世キリスト教全般にわたつて教會史的な研究がなされているかと云うとそれにしてはあまりにもまとまりのない印象をうけざるを得ない。以下二三の事柄について興味ある點を拾つてみよう。

先づ中世カトリック教會を理解する上でも、又キリスト教それ自體の歴史的形態又は運命を考察する上にも、原始教會、古代カトリック教會、中世カトリック教會として通常分類されるものの相互の連關係—新しい發展とその必然性と云う一つの問題が提起される。

著者は、原始キリスト教會に於ける純粹な福音の信仰が次第にヘルニズム文化世界との接觸を深めこれを攝取すると共に自らも世俗化、又ヘルニズム化し、かかる教會の上にラテン的法制的要素が加つて中世カトリック教會が形成されて行つたと云う普通の考え方は必ずしも正しいものではないとされ、中世に於けるカトリック主義は既に原理的に原始教會に於てもその淵源が覗える程包

括的なものである事を主張し、ペウロやヨハネに於てそれをみようとしている様である。もとより著者の立場は穏健一時は曖昧と見える程の一であり吾々も別に難點を見出す事は出来ないにしてもこの問題は軽々しく論じ去られない重大なものであるからもつと深い説明が要求せられるのではないか。又ペウロの場合など特に云えるのであるが彼の思想は原始教会に於ては獨特のものでありそれだけに當時にもそれ以後の時代にも理解されなかつたわけであり、したがつて彼のみならず、アンティオケ教會——ここでかのマタイ傳十六、十八章が、又イグナチオスが出たわけであるが——ロマ教會の歴史的事情と中世カトリック教會との關係が、より精細で厳密な歴史的考察を以て研究されてもいいのではなかろうか。

次にアウグスチヌスの部の始めにあげられている「初代キリスト教辯證文學」に關しては教えられるところが多い。從來ハルナックやローフスの教義史家は、辯證家が教會的信仰の基礎の上に立つとは云うものの當時のヘレニズム化運動の傾向に順應しヘレニズム的教養の上に立つてキリスト教を辯證しようとしている風に解釋したに對して、文献學者ゲッフケンらは資料批評研究より辯證家がその思想や方法に於て全くギリシャ古典、ヘレニズム期文書を出でない事を結論している。これに對して著者は辯證家の位置や意圖内容より積極的に教會的神學的契機をそこに見出そうとされ、又その様式に於てもむしろユダヤ教的なもの——勿論ブイロン的なものであるが——より學んでいるのではないかとみられてい

る。初代キリスト教が始めてギリシャロマ世界の中にその存在をみとめられるようになつたとき、様々な誤解や當時の思想に對して辯證學者が如何に自己を辯護したかについて研究する事は興味ある問題でありその上でよき示唆が與えられる事と思う。

中世又中世カトリック教會を如何に理解すべきか。ルネツサンス以來の偏見を捨ててこの問題に虛心坦懐にふれてゆくとき問題があまりにも複雑なのにおどろくのであるが、著者は第三部に於て思想史的考察よりむしろその嘗つての著にもみられたように基督教史的方向からこれを見ようとする。それによると中世の世界にもかなり時代的に又地域的に發展變化がみられるのであり、又この世界はキリスト教的文化によつて統一されたものではなく——それは時代的に又地域的に限られていた——むしろ一切を包摶するかに見えて實はその内部に於てつねに矛盾衝突の可能性をはらむ對照の世界であった。著者は特にこの事をドイツのキリスト教に於て又教會と國家の政治的爭いに於て考察されている事は興味ぶかい。教會は何時時代に於ても歴史の中に立つ以上たかひの姿に於て理解されるべき事が今更の如くに教えられるであろう。

以上稚拙な思想にすぎぬものを敢えてしたのは石原氏の勞作に對して感謝のあまりにしたもので、未だ研究を始めたばかりで千數百年に亘る教會史についての根據ある實證研究と確乎たる歴史觀を持たぬ私は批評など思ひもよらぬ事である。
(翻印刷上の間違いであるが七二頁三行目の「narrative」の綴り)

が間違つていた。)

(土肥)

——シカゴ便り——

嶋田啓一郎

シカゴ大學の雰囲氣は、私に學問的刺戟を與えて與れます。特にアダムス教授とは格別親しく成りました。同じ問題に基づか、同じ悩みを深くしつつある事を識り信仰と社會科學の問題に就て一層探求心を強くして居ります。當大學にて、讀書本位である様に心掛けては居りますが、その他面に、米國社會の思想的的局面の特質を物語るところの種々の集會に出席し、社會施設を見学する事に極力努力を拂つて居ります。かくするうちに、此の國に來る事の出來たことが、本當に幸いであつたと思ふことがあります。

當地にあつて、石川清先生とは格別に親しくして頂き、心の通ふ物語をする事が多くなりました。自稱リベラリストの先生の中に、正直な信仰上の批判精神を見出し、先生と共に率直に信仰問題の深奥の眞理を求める一年を送り度いと存じて居ります。又、石川先生が居て下さるので、家庭に在る心地で樂しい時間を過す事が出来ます。

マックナイト先生と机を並べて、キンチロー教授の講義に出席して居ります。マックナイト先生御夫妻が、私の居る寄宿舎の向

い側に御住いなので度々御邪魔に上ります。
十一月九日、ジエローム・デーヴィス先生がシカゴ大學に來られます。當地に來た一つの願いは、同先生に會見する機會を獲たいとの願望にあつたのですから十七年振りに同先生に御目にかかる事の出来るその日を翫首して居ります。

パウル・ティリッヒとベルチャエフ此の二人の思想家に、私は心惹かれて居ります。日本に歸つたら、ゆづくりと此の二人の思想を筆に表わしてみたいと願つて居ります。シカゴ大學ではティリッヒの著作が廣く愛讀されて居ります。ネオ・オーソドクシイと、シカゴのリベラリズムとの橋渡しをするのが、ティリッヒではないかと愚考して居ります。

(十月七日)

彙報

讀書會

六月四日 出席 柏井、本宮、魚木、民秋、ウッド、ウェンガー

一 藤代、飯、土肥、遠藤

C. H. Dodd, *Gospel and Law*, 1951. はじめ

七月二十一日 出席 山崎、大下、本宮、小田、藤代、民秋、
ロイド、瀧田、土肥、遠藤

Jacob, Hoschander, *The Priests and Prophets*, 1938. はじめ